九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『豊饒の海』試論（2）：物語られる「転生」をめぐって

稲田, 大貴
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年

https://doi.org/10.15017/15100

出版情報：九大日文. 12, pp.46-58, 2008-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

『豊饒の海』試論（2）
――物語られる「転生」をめぐって――

稲田（INADA） 大貴（Daiki）

一、問題の所在

『春の雪』の後半部以降、『天人五衰』結末部に至るまで、松枝清顕の想い人であった綾倉聡子は物語から姿を消す。

筆者は先の論文[1]において『天人五衰』結末部の、「松枝さんといふ方は、存じませんな」という聡子の言葉がなぜ矛盾と理解されるのか、という問いに対する論考を試みた。『天人五衰』結末部の聡子の言動に着目することで『春の雪』の聡子と月修寺門跡の聡子の同一性を疑問視し、『春の雪』における聡子に内的焦点化して語られる箇所の分析を行った。そのことから『春の雪』後半部以降の聡子が物語から追い出され、語られない空白の領域にあることで、『春の雪』の聡子と、月修寺門跡となった聡子の物語における存在の時系列が異なる可能性を指摘した。また清顕の夢を夢日記に書かれたものと書かれなかったものに分類することで夢日記の内部における清顕の存在を清顕の友人、本多繁邦の見てきた世界（あるいは物語）の端緒と位置づけ、本多の物語を夢と現実の狭間で織り成される転生を見る物語であるとした。このことから聡子の言葉が矛盾と理解されるのは、本多の物語の外にある聡子の言葉が、その物語内において捉えられることが原因であると論じた。

しかし聡子は、姿こそ現さないものの、本多の心理描写、あるいは蓼科との会話中に想起され、全く語られないわけではない。また『天人五衰』結末部において再度、物語られていることも事実であり、聡子を完全に物語の語られない空白の領域にあると位置づけることはできない[2]。つまり聡子は物語内にあると同時に物語の外にもあり、その位置は揺らいでいると言える。ではその揺らぎの原因は何なのだろうか。

『豊饒の海』四部作は本多の時間軸に沿って進んでおり、『豊饒の海』全体をテクストとして捉えたとき、本多の物語はその内部の、最も大きな物語として構成されている。清顕、勲、透の物語（ジン・ジャンは一度も内的焦点化されず、本多の視点からのみ語られる）はその本多の物語と入れ子構造の関係にあると考えられる。本多の物語は、この一連の、一見すると転生であるように見える「転生」を見ることによって構成されている。このような本多の物語において、語られない空白の領域にあるはずの聡子の存在が語られる必然性はあるのだろうか。このことを論じるためには本多の物語の分析を行う必要があるだろう。

本稿では一連の「転生」を見る本多の性質を分析し、本多が「転生」をどのように認識しているかを考察する。また一連の「転生」を転生たらしめている夢告、三つの黒子、年齢の一致といった証しは唯識論、四有輪転などの法によって保証されて

いるように思われるが、唯識論、四有輪転は転生の根拠としてのそれらの証しを保証する法たりえているかという問題を考える。これらを踏まえ、物語構造の面から本多が「転生」を転生と認識する根拠となる「法」について考察することで、姿を現さないながらも語られる聡子の存在が、本多の物語においてどのような機能を持っているか明らかにする。以上の論考から『天人五衰』結末部において、なぜ再び聡子が物語られなければならなかったのかという問題を解決するための端緒を見出すことが本稿の目的である。

なお本稿では『奔馬』、『暁の寺』における勲、ジン・ジャンへの「転生」を主な考察の対象とし、『天人五衰』の透への「転生」に関しては、その構造の面において勲、ジン・ジャンとは異なると考えられるため、考察の対象からは除外し、稿を改めて論じることにしたい。

二、本多の語られ方

本多の物語とは、夢と現実の狭間で織り成される転生を見る物語である。この見るという行為は『豊饒の海』四部作を通じて、何度も語られる本多の性質である。

> この若さで、彼はただ眺めてゐた！　まるで眺めることが、生まれながらの使命のやうに。
> （中略）
> 『清顕は一体これからどうするのだらうか？　自分は友として、ただ茫然と、成行を眺めてゐるだけでよいのだらうか？』（『春の雪』第二十九章）

一方、繁邦はかうも思つてゐた。はじめ自分に無縁なものと考えて傍聴しはじめた裁判が、今はたしかに無縁なものではなくなつた代りに、増田とみが目の前で吹き上げた赤い熔岩のやうな情念とは、つひに触れ合はない自分を発見するよすがにもなつた、と。

（中略）

本多は自分の理性がいつもそのやうな光りであることを望んだが、熱い闇にいつも惹かれがちな心性をも、捨てることはできなかつた。しかしその熱い闇はただ魅惑だつた。他の何ものでもない、魅惑だつた。清顕も魅惑だつた。そしてこの生を奥底のはうからゆるがす魅惑は、生ではなく、運命につながつてゐた。

本多は清顕への忠告を、今しばらく差控へて眺めてゐようと思つた。（『春の雪』第二十九章）

このように『春の雪』から既に、本多が見る人間であることが語られている。しかし、この本多の見る人間であるという性質は清顕のような人間の持つ「熱い闇」とは相反するものである。見るという行為はそこに必ず「距離」を必要とし、決してその対象と同一化することは有り得ない。本多は、彼が見る人間で

ある以上、決して清顕の物語には参入することができない。しかし、清顕の物語も本多という見る人間の介在なしには決して物語たりえないのである。

それにしても見るとはいかなることなのか。本多が清顕の恋の顛末を見ることで、それは清顕の物語となった。そしてその清顕の物語は『豊饒の海』というテクスト内部で理解されるとき、一連の「転生」の始まりとして、夢と現実の狭間で織り成される転生を見る物語である本多の物語の一部として理解される。見るという行為から、見られる対象が物語化されるとき、その見る行為には必然的にある種の認識が含まれている。その認識とは、見られた対象を掬い上げることによって物語化するものであり、本多の物語において本多が見たものについて語られるときには、そこには既に本多の認識が含まれているのである。

また本多については次のようにも語られる。

> 友だちと云つては同級生の本多繁邦だけと親しく附合つた。もちろん清顕と友だちになりたがる人は多かつたけれども、彼は同年の野卑な若さを好まず、院歌を高唱してうつとりしたりする粗雑な感傷を避け、その年齢にしてはめづらしい本多の、もの静かな、穏和な、理智的な性格にだけ心を惹かれた。
>
> さうかと云つて、本多と清顕は、外見も気質もそんなに似通つてゐるといふのではなかつた。
>
> 本多は年よりも老けた、目鼻立ちも尋常すぎて、むしろ勿体ぶつてみえる風貌を持ち、法律学に興味を持つていたが、ふだんは人に示さない鋭い直観の力を内に隠してゐた。
>
> （『春の雪』第二章）

この引用からは、本多が法律学に興味を持つような理智的な人間であるということが分かる。『春の雪』においては清顕と対比される形で、本多の理智的な性格は強調される。本多の理智的性格は、法律学という姿を借り、より具体的に表される。またこのことは、父が大審院判事であるという本多の生い立ちも関係し、本多は十八歳から既にヨーロッパの自然法思想や印度古法典の『マヌの法典』などの法に親しんでいることが語られることからも明らかであろう。ではこの法とは本多においてどのような役割を果たすものなのだろうか。

> 法律学とは、まことにふしぎな学問だつた！　それは日常些末の行動まで、洩れなくすくひ上げる細かい網目であると同時に、果ては星空や太陽の運行にまでむかしからその大まかな網目をひろげてきた、考へられるかぎり貪欲な漁夫の仕事であつた。（『春の雪』第七章）

ここでは本多にとっての法のあり方が語られる。つまり法とはあらゆる事象を掬い上げる体系のことであり、それはまさしく認識の体系とも言える。本多は見る人間であり、見られたもの

は本多の「法」に掬い上げられることによって認識されるに至る。これを踏まえれば、本多の物語、夢と現実の狭間で織り成される、一連の「転生」を見る物語も「法」に支えられていると考えられる。ここで『奔馬』の冒頭部に着目してみたい。

> 昭和七年、本多繁邦は三十八歳になつた。
> 東京帝国大学法科大学在学中、高等文官試験の司法科に合格し、大学を卒業すると、司法官試補として大阪地方裁判所詰になり、その後ずつと大阪で暮してゐた。昭和四年に判事に任官し、地方裁判所の右陪席まで行つてから、昨年大阪控訴院へ転出して、控訴院の左陪席になつたのである。（『奔馬』第一章）

『奔馬』の冒頭部がこのような文章から始まることはもっと注意されてよい。『奔馬』は「転生」が始まるテクストであり、それを見る本多が法に携わる職に就いていることの紹介から始まることは、「転生」における「法」の必要性を強く打ち出していると言える。本多が「法」に拠る人間であることが強調されることはこの意味において、『奔馬』の始まりとして必要不可欠ではないのだろうか。

以上、論じてきたように本多は見る人間であり、「法」に拠る人間であるという性質を有している。では本多はいかなる「法」によって「転生」を見ることで転生であると認識するに至ったのであろうか。

三、物語られる「転生」

『奔馬』から一連の「転生」は始まる。清顕→勲→ジン・ジャン→透と「転生」が起こってゆくが、その証しとなるのは、清顕が本多に遺した夢日記（或いは夢）と左脇腹に並ぶ三つの黒子である。

> これに見習つて滝へ近づいた本多は、ふと少年の左の脇腹のところへ目をやつた。そして左の乳首より外側の、普段は上膊に隠されてゐる部分に、集まつてゐる三つの黒子をはつきりと見た。
> 本多は戦慄して、笑つてゐる水の中の少年の凛々しい顔を眺めた。水にしかめた眉の下に、頻繁にしばたたく目がこちらを見てゐた。
> 本多は清顕の別れの言葉を思ひ出してゐたのである。
> 「又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で」（『奔馬』第五章）

本多は清顕の体に見た三つの黒子と、病の中で清顕が口にした「又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で」という言葉との一致から、清顕の「転生」を見、戦慄した。本多のこの戦慄は転生という一種の神秘に搏たれたという解釈ができるが、この後、本多は殆ど疑うことなく、この「転生」を転生であると見做している[3]。本文には「しかも神秘は、それ自体の合理性をそなえてゐた」とあり、本多は勲の年齢から四有輪転などの仏説を持

ち出し、「転生」が転生であることを補強する。これは本多が「法」に拠る人間であることを考えれば、当然のことであろう。しかし左脇腹に並ぶ三つの黒子と夢告は一体、何を根拠として転生の証したりえているのだろうか。それがただの偶然の一致という可能性はこの段階では否定されない。この問題に関しては後に論じることにして、勲における夢日記の実現を確認しておきたい。

そのとき光りが翳つて、空の一角からあらはれた鳥の渡りが、おびただしい囀りと共に頭上に迫つてきたとき、清顕は空へ向けて猟銃の引金を引いた。彼はただ無情に撃つたのではない。いひしれぬ怒りと悲しみのやうなものに身内がいつぱいになつて、鳥へといふよりは天空の巨大な青い目をめがけて撃つたのである。

（中略）

そのとき野中の道を、遠くから自分と同じ白装束の一団が来るのが見られた。かれらは粛々と進んで来て、一、二間先に立止つた。見ればおのおのが、手につややかな榊の葉の玉串を携へてゐる。

清顕の身を潔めるために、かれらは清顕の前でその玉串を振り、その音がさやかに響いた。

かれらの一人の顔に、清顕はありありと、書生の飯沼の顔を見出しておどろいた。しかもその飯沼が口をひらいて、清顕にかう言つたのである。

『あなたは荒ぶる神だ。それにちがいない。』（『春の雪』第三十四章）

勲にとつて、それは目の前をおほふほどの、大きなさわがしい標的だつた。さつき門番が言つた「踏出し」とはこれだと思つた。彼はたちまち村田銃を構へて射つた。

（中略）

向うから白衣の一群が近づき、まだ顔は定かではないが、手に手に幣を携へてゐるのが異様な感じがする。ここらで白衣の人といへば、塾の宿泊者に決まつてゐるが、あんな風に自分の同士が、人に率ゐられて粛々と来ることはありさうもない。先頭の人は年配のやうで、これに並んで一人だけ背広姿の男がある。年配の率ゐる手の顔に、やうやう父の八字髭を認めた勲は愕いた。

（中略）

「困つたことだ。鉄砲まで持ち出して、海堂先生の言はれるとほりだ。お前は荒ぶる神だ。それにちがひない。」

（『奔馬』第二十三章）

細部にこそズレが見られるものの、清顕の夢日記はこのように実現した。しかしこれも偶然であるという可能性（ここまでの一致は限りなく低いが）を完全には消去できない。しかもこれが実現する前、つまり三光の滝の下で勲の三つの黒子と、清顕の夢告を確認した時点で、本多は転生を信じている。本多にとって、

ここでの夢日記の実現はあくまでも転生を補強する材料でしかないのである。では『暁の寺』ではどのように、本多は「転生」を転生と認識したのだろうか。

『暁の寺』において「転生」は『奔馬』とは異なった形で現れる。四十七歳になった本多は仕事でタイへと赴く。そこでかつての学習院の学友であったパッタナディド殿下の末娘、ジン・ジャンと会う。幼いジン・ジャンは自分の前世は日本人であるといい、清顕、勲の転生であることを主張する。本多は確認のために「松枝清顕と私が、松枝邸の中ノ島にゐて、月修寺門跡の御出でを知つたのは、何年何月か」と尋ね、「飯沼勲が逮捕された年月日」を尋ねた。幼いジン・ジャンはその質問に澱みなく答えたのである。そしてこの「転生」は夢日記と勲の夢によって「予言」されていた。

「このところシャムの王子たちとは会ふ機会も少いのに、どういふものか、今ごろになつて、シャムの夢を見た。それも自分がシャムに行つてゐる夢である。……自分は部屋の中央の立派な椅子に、身動きもできず掛けたままである。その夢の中の自分はいつも頭痛がしてゐる。

（中略）

目を落すと、自分が指にはめてゐるエメラルドの指環が見える、それはジャオ・ピーがはめてゐた指輪が、いつのまにか自分の指に移つたものらしく、護門神ヤスカの怪奇な黄金の顔の一対が、石を囲んでゐる意匠もあれとそつくりである。

自分は戸外の日の反映を受けてゐるその濃緑のエメラルドの中に、白い斑とも亀裂ともつかぬものが、霜柱のやうにきらめいてゐるのを眺めてゐるうちに、そこに小さい愛らしい女の顔が泛んでゐるのに気づいた。

背後に立つてゐる女の顔が映つたのかと思つて振向いたが、誰も居ない。エメラルドの中の小さな女の顔は、かすかに動いて、さつきはまじめに見えたのが、今度は明らかに微笑を湛へてゐる。（後略）」（『春の雪』第十一章）

酔ひに赤らんだ勲の寝顔は苦しげに荒々しく息づいてゐたが、眠つてゐるあひだも、眉は凛々しく引締めてゐた。突然、寝返りを打ちながら、勲が大声で、しかし不明瞭に言ふ寝言を本多は聴ひた。

「ずつと南だ。ずつと暑い。……南の国の薔薇の光の中で。……」（『奔馬』第三十八章）

本多は夢日記と勲の寝言にジン・ジャンへの「転生」が示唆されていることをこの段階で知っている。問題はどの段階で本多がジン・ジャンを清顕、勲の転生と見做したかということだが、タイの古書店で見かけた詩集の「絶望的な政治詩」に心打たれ、「これほど勲の霊を慰めるものはない」と考えた本多はそれをジン・ジャンへ献上していることから、この時点で既にジン・ジャンを転生と認めていると考えられる。このときの本多はベ

ナレス旅行から戻ったあとであり、これ以前にジン・ジャンと会った、初対面のときとパンパイン離宮へのドライブのときのいずれかで本多は転生を認めていたことになる。しかしパンパイン離宮へのドライブでは、本多はジン・ジャンに三つの黒子を確認できていないにも拘らず、その後には転生と見做しているのである。つまりジン・ジャンと初めて面会し、幼いジン・ジャン自身の言葉と夢告との一致を確認した段階で本多はジン・ジャンを転生であると認識していると考えられる[4]。三つの黒子はこのときのジン・ジャンには見られないと言明されており、転生の証しとしては用いられていない。

後の『暁の寺』第二部において本多は、成長したジン・ジャンの三つの黒子を確認しようとする。その場面は二箇所あるが、プールの場面では黒子は確認されない。ジン・ジャンに黒子が現れるのは『暁の寺』の後半部、ジン・ジャンと慶子のレズビアン行為を本多が覗いている場面だけである。もし三つの黒子が転生の証しならば、このように黒子が突然現れるというようなことはあり得ない。三つの黒子とは何か別の証しなのではないか。ここで『暁の寺』における本多の動向に着目したい。

本多は成長したジン・ジャンに恋心を抱いている。それはジン・ジャンの世界へ本多が参入することであり、見ることを止めることと同義である。しかし本多は覗き穴から見てしまうのである。そこで繰り広げられていたのはジン・ジャンと慶子のレズビアン行為である。このとき、本多にとってジン・ジャンは「不可能」となったのである。実際、『天人五衰』に登場する透以外は、自身の三つの黒子について言及しない。久松慶子はジン・ジャンとのレズビアン行為の最中に見た可能性はあるが、言明はされておらず気づかなかった（あるいは見えなかった）可能性は留保される。また慶子の甥の克己は、ジン・ジャンに迫った翌日、本多の三つの黒子を見たかという問いに対して、「見ましたとも」と答えているが、本多の覗きの描写からは嘘であることが明らかである。それを見て、確認していることが確実であるのは透を除けば、本多だけなのである。そう考えれば、三つの黒子は本多にのみ見える、「不可能」を示す身体的表徴と言える。そして本多はそれを自覚している。しかし本多自身は三つの黒子を転生の証しとして受け取っているだろうことは否定できない。本多にとって自身の参入の「不可能」と転生とはほぼ同義なのである。

本多は『奔馬』においては清顕の勲への「転生」を、三つの黒子と清顕の「又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で」という言葉を証しとして転生と認め、また『暁の寺』においては夢日記の実現と幼いジン・ジャン自身が自分は勲の生まれ変わりであると言明していることを証しとして、転生を認めている。幼いジン・ジャンが自ら生まれ変わりであると言明したことを除けば、本多は勲、ジン・ジャンへの「転生」を三つの黒子と夢告を証しとして、転生と認識していることになる。幼いジン・ジャンが自ら生まれ変わりであると言明したことに関しては、成長したジン・ジャンはそのことを覚えておらず、「小さいころの私は、鏡のやうな子供で、人の心の中にあるものを全部映す

ことができて、それを口に出して言つてゐたのではないか、思ふのです。あなたが何か考へる、するとそれが私の心に映る、そんな具合だつたと思ふのです」という彼女の言葉によって、転生の証しとしての信憑性が揺らぐことになる。また三つの黒子と夢告に関して、小林康夫は次のように述べている[5]。

> しかも、唯識論によって語られる輪廻の方がどのようなものであれ、それはけっして夢による後の生の先取りも、三つの黒子という肉体の特異な痕跡をも保証してはいないことに注意しておかなければならないだろう。少なくとも物語が語っている限りでの阿頼耶識と種子熏習の理論は、論理的には少しも夢の証しと肉体の証しを必然化させはしない。

確かに小林が論じているように、テクスト内において夢日記の実現と三つの黒子は転生の証しのように扱われながら、論理的にはそれが転生の証しであることを保証していない。しかしながら先に見たように、本多は確かにそれらを、「転生」が転生である証しとして受け取っている。このことは、本多が「法」に拠る人間であることを考えれば奇妙なことである。何の「法」にも（少なくともテクストで語られている限りでは）支えられていない夢日記の実現や三つの黒子を証しとして、本多が転生を認めることがあり得るのだろうか。あるいは語られない「何か」によって夢日記の実現や三つの黒子は転生の証として保証されているのだろうか。どちらにしても夢日記の実現や三つの黒子が転生の証拠であることを保証するものが明らかでない以上、それらが転生の証拠ではないという可能性は留保され、ここから、「転生」が果たして転生であったのかという疑念が生じることになるのである。

四、決定不可能性

『豊饒の海』における「転生」が転生であるか否か、という問題は先行研究において既に論じられてきた。この問題を最も早く取り上げたのは長谷川泉である。長谷川は三つの黒子を「近代的に解釈」することで、清顕と勲の間の血縁関係を考察したが、その可能性はないと自ら否定している[6]。しかしながら長谷川の提示した、「転生」が転生であるか否かという問いは残り続けた。

長谷川の提示した問いはその後、對馬勝淑、佐藤秀明によってより詳細に論じられた。對馬はテクスト内に提示されている四有輪転の法が揺らいでいることを指摘し、その法に基づいた転生を否定している。その上で、本多による転生の認識を「独善的・先入観的意識」によるものと論じている[7]。また對馬論にやや遅れて、佐藤は長谷川によって否定された、清顕と勲の血縁関係の可能性を考察している。ジン・ジャンに関しては、慶子の動向を分析することで、ジン・ジャンが「贋物」であることを知っていたと論じ、転生を否定することで、『豊饒の海』

において絶対的に扱われてきた輪廻転生の枠組みを相対化させている[8]。この後、佐藤論を受け、太田雅子が物語分析の観点から転生を肯定する論考を行っている[9]。

しかしなぜ、「転生」が転生であるか否かという問題が問われなければならなかったのか。輪廻転生は『豊饒の海』の主題の一つとして扱われている。佐藤論でも「本論は『豊饒の海』の基本的な枠組みである輪廻転生を問題とする」と始まり、輪廻転生が『豊饒の海』の「基本的な枠組み」であることを疑う読者は殆どいないと思われる。しかしそれはなぜなのか。「転生」の証しであるらしい夢日記（あるいは夢）の実現も三つの黒子も、常に語り手によって先に明示される。つまりそれらは、物語の伏線として語られており、これによって読者は一連の「転生」が転生であるという読みに誘導され、その読みは更に『豊饒の海』の主たる視点人物である本多が「転生」を転生と見做すことで強化される。こうして転生という神秘は読者に認識されるのである。しかし読者はそれを疑う権利を有している。長谷川は三つの黒子を「近代的に解釈」したが、これは夢告や三つの黒子が、神秘を容認し得ない「近代」においては転生の証しとして決定力に欠けることに由来する。この理由により、『豊饒の海』における一連の「転生」の真偽を問うという議論があったわけだが、そもそもこの議論は有効なのだろうか。

転生の真偽を問うためには、法を必要とする。對馬論、佐藤論においては四有輪転による生年月日、死亡日の一致という転生の根拠を切り崩す形の論考が試みられている。これらはテクスト内において転生を決定付けているとみられていた法の一つが、実は転生を根拠付けていないことを明らかにしたという点において評価される論考である。しかしこれらは、決して転生の真偽を問うものではない。転生を真あるいは偽であると決定付けるためには普遍的な法が要求される。佐藤は論の末尾で「〈真理における根拠〉といった議論とは性質を異にする」と述べている。この〈真理における根拠〉とは転生を決定付ける普遍的な法と推測される。しかしそれは不在である。転生を真たらしめる法が存在しなければ、それは決定不可能であり、真偽を問うことは不毛な試みにすぎないのである。よってここで問題にされるべきことは、本多において「転生」を真たらしめた「法」とは何かということである。

五、希求される「法」

本多は夢告、三つの黒子、あるいは「転生」者自らの言葉を証しとして、勲、ジン・ジャンへの転生を認識している。しかしこれらの証しは、神秘として認めるのならばともかく、論理的には転生の証したりえていないことは前述した通りである。理智の人であり、「法」に拠る人間である本多が一連の「転生」を転生であると認識するためには、これらの証しが何らかの「法」によって証したりえていなければならない。ここで物語の構造に目をむけてみたい。本多は『奔馬』、『暁の寺』において「転生」を知った後に、必ず「法」を求めている。

しかも神秘は、それ自体の合理性をそなへてゐた。清顕が十八年前、「又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で」と言つたとほり、本多は正しく滝の下で、清顕と同じ箇所に三つの黒子の目じるしを持つた若者に会つた。それにつけても思はれるのは、清顕の死後、月修寺門跡の教へに従つて読んださまざまな仏書のうちから、四有輪転について述べられた件りを思ひ起こすと、今年満で十八歳の飯沼少年は、清顕の死から数へて、転生の年齢にぴつたり合ふことである。

（中略）

仏説はこのやうに説いてゐる。もとより本多はむかしさういふ仏説を、一つの童話のやうにして読んだにすぎないが、今、忽然とそれを思ひ出した。（『奔馬』第六章）

『暁の寺』の該当箇所に関してはあまりに長いため引用は避けるが、本多がタイでジン・ジャンに出会い、帰国した後の第十三章から第十九章を参照されたい。それはピュタゴラスに始まる西洋の輪廻転生説から、唯識論へと至る。ここで語られる唯識論による輪廻転生説は一見、『豊饒の海』全体を貫く「転生」の論理を示しているかのように見える。しかしながら先に述べたように、これらは夢告や三つの黒子を転生の証しとして保証するものではない。またこれらの法は本多が「転生」を転生と見做した後の、言わば後付けの法であり、本多が「転生」に直面したときは存在しない法なのである。では一体何が、本多にとって「転生」を転生たらしめる「法」となっていたのか。

本多が「転生」を知った後に「法」を求めていることは前述した。しかし本多は転生の証しを見ると同時に、転生であると認識している。つまりそこには、既に何かしらの「法」が存在していると考えられる。後に残るのは、その「法」を確認することだけである。そして本多が、先に挙げた仏説などによる法の後付けを行う前後には、必ず聡子について語られるのである。

それにしても、清顕とゆかりの奈良の地で、この転生の奇蹟に触れたのは、何たる奇縁だらうか。

『朝を待つて、まづすべきことは率川神社にゆくことではない。車を駆つてまづ帯解へ行き、朝の早い尼寺に聡子を訪れて、清顕の死以来の無沙汰を詫び、そしてこの転生の吉報を、よし信じられなくても、真先に告げるのが自分の役目だ。前の門跡の薨去ののち、現門跡としてのあの人の尊い名はほのかにきこえてゐる。やや衰えの兆した美しい顔に、今度こそはいつはりのない激烈な歓喜を見ることができるだらう』（『奔馬』第六章）

この日から本多は聡子に会ひたいといふ気持を抑へかねたが、これには蓼科の口から、聡子が今なほ美しいといふ証言が得られたことも役立つてゐた。焼趾のやうな「美しさの廃墟」を見ることを何よりも怖れてゐたからである。

（『暁の寺』第二十二章）

この二つの場面において物語から姿を消したはずの聡子について語られるのはなぜなのか。聡子は清顕の想い人であり、その清顕が「転生」した以上は、聡子について語るのは必然だと言える。しかし清顕の転生だと本多が認識したのは、三つの黒子を持ち、夢日記を本多に託した清顕が「不可能」、つまり聡子に対して行為し、その命を散らしたからである。少なくとも本多の認識下において聡子という存在は清顕にとっての一種の業となっているとも言える。つまり本多の認識において清顕は聡子の存在故に転生しなければならないのである。この意味においてこれらの場面で語られる聡子は、本多にとって「転生」を転生たらしめる「法」となっている。よってこの清顕に始まる一連の「転生」は聡子という「不可能」の存在によって支えられていると言えるのではないだろうか。しかしこの聡子の存在は決して普遍性を有した法ではなく、あくまでも本多にのみ適用される個的な「法」であり、本多においてのみ、一連の「転生」を転生であると認識する体系としての「法」であると言える。

またこれらの場面で語られる聡子は本多の認識による、いわば聡子の「像」であり、物語に姿を現さない聡子とは決して一致しない[10]。この聡子の「像」は聡子本人が語られないことによって表出する「像」であり、語られないが故に本多の認識における聡子の「像」は一連の「転生」を転生たらしめる「法」となっているのである。そして本多の認識下の聡子の「像」とそれを生み出している語られない聡子という二重性こそが、聡子が物語内にもあり、外にもあるという揺らぎを生み出していると考えられる。

六、まとめと今後の展望

聡子が本多の物語、つまり夢と現実の狭間で織り成される転生を見る物語の中で、どのような機能を担っているのか。本稿では本多自身の性質と一連の「転生」の物語られる様から、本多の認識における聡子の「像」が「転生」を転生たらしめる「法」の役割を果たしていることを明らかにした。そしてその聡子の「像」は聡子本人が物語に姿を現さず、物語られないことに起因するものであり、聡子という存在は本多の認識下の聡子の「像」とそれを生み出している語られない聡子という二重性を有しており、それが物語内にもあり、外にもあるという揺らぎを生み出していると結論づけた。

しかしこの結論では、なぜ『天人五衰』の結末部において語られない聡子が姿を現し、語られなければならなかったのかという問いには未だ答えてはいない。『天人五衰』において一連の「転生」として扱われている安永（本多）透は、これまでの「転生」者とは明らかに一線を画している。その理由としては、透が三つの黒子を自ら確認していること、夢日記の記述が提示されないことなどが挙げられる。しかしここで問題となるのは彼が清顕に連なる転生であるか否か、ということではない。先に述べたように転生であるか否かは普遍的法が不在である以

上、決定不可能である。問題は本多の認識下における転生という視座から見たとき、透がいかなる存在かということである。この視座から透の分析を行い、それを通じて透の失明、絹江の妊娠発覚の後に、なぜ本多は月修寺に赴かなければならなかったのかを考えることで、なぜ聡子が姿を現し、語られなければならなかったのかという問題に答えたい。そしてそれは『天人五衰』の結末部における聡子が一体「どこ」にいるのかという最終的な問いへの解答を導きうるものであると考えている。以上の問題を次稿における課題とし、本稿を終える。

【注記】

1　拙論「『豊饒の海』試論（1）――聡子の言葉　『天人五衰』から『春の雪』へ――」（「九大日文」二〇〇八年三月）

2　柴田勝二は「憑依の脱落――『天人五衰』の〈終り〉」（『三島由紀夫――魅せられる精神』二〇〇一年十一月　おうふう）の中で、小林康夫の「歴史と無の円環――三島由紀夫『豊饒の海』」（『出来事としての文学』一九九五年四月　作品社）を引きながら、「聡子も月修寺も明らかに『天人五衰』の虚構の構成要素であり、それらが物語の「外部」に属するとはいえない。」と述べている。

3　對馬勝淑は「転生の観点から見た『豊饒の海』の悲劇性」（『『豊饒の海』論』一九八八年一月　海風社）で「何故に、本多がその偽物なる転生の組み合わせを本物だと信じたかと言えば、本多は眼前の諸事実を一方的に転生によるものだとまずは是認してしまい、その前提のもとに、それに合理性を与えんとして仏説を誤用してしまったからなのである。」と論じる。しかし本多が「眼前の諸事実」を転生と「是認」した理由についてはこの論文では述べられていない。

4　『暁の寺』第二部の本多の心理描写において、「ジン・ジャンにはつきり清顕や勲の転生の証跡があらはれたはうがよい。」（『暁の寺』第三十二章）という思いが語られる。成長したジン・ジャンは自ら生まれ変わりであると言った幼時の記憶がなく、転生の証しは、タイの王女であることと夢日記との一致しかないことになる。これは転生のより明確な証しを求めているのであり、ジン・ジャンとの出会いにおいて転生と見做したこと自体を否定するものではない。

5　小林康夫「無の透視法――三島由紀夫『豊饒の海』について」（『無の透視法』　一九八八年十二月　書肆風の薔薇）

6　長谷川泉「豊饒の海」（「現代のエスプリ」一九七〇年五月）

7　前掲　對馬勝淑「転生の観点から見た『豊饒の海』の悲劇性」

8　佐藤秀明「「贋物」の主人公――『豊饒の海』論序説――」（「昭和文学研究」　一九八八年七月）

9　太田雅子「『豊饒の海』論――転生へと展げる読解の可能性」（椙山国文学」　一九九五年三月）

10　大石加奈子は『天人五衰』研究――結末の謎　クローズアップの盲点」（「阪神近代文学研究」　二〇〇〇年七月）において、『天人五衰』結末部の聡子について、「〈①の聡子〉―本多の精神空間に映っている六十年前の聡子の映像（転生者を知っている。）〈②の聡子〉―月修寺の表面にいる「光」の側面の聡子（転生者を知らない。）〈③の聡子〉―月修寺の内奥にいる「暗黒の海」の聡子（転生者を創造する。）」の三つに分類しているが、転生を決定不可能なものとし、本多の認識に基づいた場合、①の聡

子が③の聡子について述べられている「（転生者を創造する）」役割を負っている。

※　本文引用は全て『決定版　三島由紀夫全集13』、『決定版　三島由紀夫全集14』（二〇〇一年十二月、二〇〇二年一月　新潮社）に拠る。なおルビ、傍点は省略した。

【付記】

「九大日文」十一号において先に発表した拙論「『豊饒の海』試論（1）――聡子の言葉　『天人五衰』から『春の雪』へ――」で取り上げた高田一樹氏の論文のタイトルに誤りがありました。

（誤）「三島由紀夫『豊饒の海』ウロボロスの偏在（下）」

（正）「三島由紀夫『豊饒の海』ウロボロスの遍在（下）」

著者の高田氏、並びに読者の皆様にはお詫びして訂正いたします。

（九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年）